

---

# 月の光と悪い魔女

こつぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月の光と悪い魔女

### 【Zコード】

Z0700L

### 【作者名】

こつぶ

### 【あらすじ】

「ナンが新一に戻つて一ヶ月。『富野志保』ではなく、『灰原哀』として生きることを決めた後の話。肝試しで相手に逃げられ、途方にくれる彼女の許に現れたのは・・・。光哀です。Candle light閉鎖に伴い、移行作品。

明かりもない真っ暗な暗闇の下。

その少女、灰原哀は深々と溜息をついた。

「まったく、困ったものね・・・」

一体どうしてこんなことになったのだらう。

事の始めは、帝丹小学校3年C組担任の小林教諭が計画した3年生お別れ会。

お昼過ぎ、一度下校した子供たちの再登園で始まったこの会は体育馆にて始まつた。

『お楽しみ』と称しているんな出し物、ゲーム・・・。そいやつて交流を深めてから、夕方からは複数のグループに分かれてお父さんお母さんたちとのクッキングと食事会。そしてそのあとはアニメ映画を1つ見て、最後夜9時を過ぎたころに行われたのが、この今彼女が困惑する原因を作つた『帝丹小肝試し大会』なのである。ルールは簡単。帝丹小学校のあまり使われなくなつた旧校舎を1周しそれから校舎を飛び出し、校庭をぐるぐると回りながら、裏庭にある大きな社に向かう。白い狐の神様が眠つているといわれる社。これだけは参加するつもりはなかつたのに、結局参加することになつて。一緒にいるはずの相方とも逸れ、最終的にこんなところで一人途方に暮れている。

別に同じ世代の女の子のように暗闇が怖い、お化けが怖い、そう叫ぶつもりはない。

けれど、やつぱり夜の病院に次いで、夜の学校ほど不気味なものはない。しかもいつもは滅多に使わない旧校舎。使い勝手が全然わからず、途方にくれるだけで。

相方の臆病な男の子は、腰を抜かして一人自分を置いて逃げてし

まって。まあそれも、『彼』のお母さんである工藤有紀子さんが協力したという特殊メイクを施したお化け役であるから、怯えるのも無理はないとは思うけど、だからといってこんな場所に一人なんて洒落にもならない。

懐中電灯も彼が持つて逃げてしまつたし。

明かりも消えて真っ暗な廊下をただ黙々と歩き続ける。ここが学校の中なのだから、決して迷う必要もない。微か後ろの方で聞こえる悲鳴や泣き声に自分が取り残されているわけではないということともわかっている。

・・・だけど、それでもなんとなく心細くて。

「お化け役の先生でもいいから、早く出てきてくれないかしら」

本当のお化けなら困るけど。

そんなことをもやもや考えている自分に気づいたとき、思わず噴出した。

ああ、・・・昔はこんな風に怖がることも寂しく思つたこともなかつたのに。

「平和ボケなのかもしないわね」

組織から離れて早2年。その間にいろんなことがあって。

彼らと出会い、触れ合い、気がつけば彼らと同じ田線に立つて。彼らと共に歩いて。

・・・自分は変わつていったのかもしない。

でも、それもまた悪くない。

ほんの1ヶ月前まで一緒の道を歩いていた、似通つた境遇の彼は、もつそこにとはいいけれど。

ふとそんなことを考えたとき、目の前に光が見えたような気がして、哀ははつと我に返つた。

正規の出口か、はたまた別のルートか。

月の光に照らされて、窓から差し込む淡い光に彼女はほっとしてそのノブを回した。

ドアを開けば満月の光に照らされて、銀色の光に照らされて、哀はほつと息をつく。

あんなに窮屈で息ぐるしかった気持ちも、外に出ただけで開放されて。

この道はもしかしたら「ホールへ続く道ではないかもしないけれど、外へ出られたことで、道が照らされたことで、それだけで安堵感で胸がいっぱいになつて、体の力が見る見るうちに抜けていった。

そこには何もない、草がぼつぼつと生えている場所だつたけれど、裏道だつたということを知る。

さつとこの道をぐるつと回れば「ホールにたどり着けるのだらう。そうは知つていても、何となくもつ歩きたくなくて。そこにペたりと腰を下りしたまま、動かなかつた。

・・・月は綺麗で。とても綺麗で。

夜はここ数ヶ用ずっと研究室に籠つつきついで、外に出たことがなかつたから。

空を見上げたことがなかつたから。

こんなに用が綺麗に輝けることを知らなくて。道を照らしてくれることも、知らなくて。

暫く見蕩れることしか、できなかつた。

「・・・なんだ、此處にいたんですか」

その声に、哀ははつと我に返った。

誰の声か、声を聞けばすぐにわかる。その声はもう数年も聞いていた相手だから。思わず小さく笑みをこぼし、振り返ったが……。

そこにいたのは、彼女の思つ、彼ではなくて。

・・・田も鼻も口もない、のっぺらぼう。

「！？？？！」

一瞬パニックになつて、言葉を無くし、後ずさる。そんな哀に田の前のお化けはくつくつと小さく笑つた。

「僕ですよ僕」

マスクを脱げば、そこにいたのは先ほど思つたとおりの彼がいて。「つぶ・・・りやくん」呆気にとられたまま、哀は呆然とした表情で、してやつたりの彼の顔を眺めていた。

円谷光彦。・・・」の姿での、自分の幼馴染だ。

「よかつた。・・・田中くん一人で『ホール地点に泣きながら走つて来たときは驚きましたよ。

だつて君の姿が見当たらぬですからね。・・・まったく女子を置いて逃げるなんて、サイテーな人間ですよね

「・・・何、その格好？」

「いや、小林先生がたまたま余つていたこののっぺらぼうのマスク貸してくれたんで、

きつと道草くつてるだろう灰原さんを驚かせようとした。そしたらまさかそんなに驚かれるなんて」

言葉を切つて、嬉しそうに再び光彦は笑つた。

「灰原さんなら逆にお化けをやつつけてしまつてゐかと思つてましたから。・・・意外と、女の子なんですね」

「何、その言い方」

思わずむつとして言葉を強めれば、光彦はくすくすと冗談っぽく

笑つてそれから言った。

「嘘ですよ。・・・灰原さんが女の子だつて」と、僕は知つていましたよ。・・・彼の真似をしてみただけです」

「・・・え？」

きょとん、とした顔で哀が光彦を見つめれば、彼は本当に小学生なのがと疑うような微笑を、輝きを彼女に向けて。

「知つていましたよ、ずっと前から。君の優しさも、悲しさも。涙もういところも。実は全然強くないことも。・・・僕らをどんな風に見つめていてくれたつてことも。そして、コナンくんをどんな風に想つていたつていうことも」

「僕はそこまで子供じゃないですよ。

そう言つて彼は絶えず笑みをこぼしていて。彼の微笑みが月に光にとつても映えて。

その光を見ているだけで、目の前の希望を見ているだけで、自分の中にある何かがひらひらと剥がれ落ちたような、魔法が解けたようなそんな気がした。

「強がらなくていいんですよ。・・・僕の前では。彼が、僕らに別れを告げた日。君はぼつりと言いましたよね。『これでよかつたのよ』って。・・・ホントは、泣きたかったんじゃ、ないんですか？」

「？」

慈愛に満ちた、彼の声。

1ヶ月前、あの彼が解毒剤を飲む1週間前のこと。

暗い教室でその告白をしたとき、思わず呟いた言葉を、目の前の

彼に聞かれていた。

自分の迂闊さに思わず苦笑する。

「・・・もう、会つてないんですよね」

「・・・そうね、『彼』とは会つてないわ」

だつて、彼はもう『彼』であつて、『彼』じゃない。

「会えないんですか？」

「会えないわね」

もう。

「もう魔法は解けたんだから」

「え？」

「悪い魔女にかけられた魔法は、もう解けたの。・・・彼は自由になつたのよ？・・・だから、これでよかつたの」

こんなことを言つても、あなたにはわからないでしょうけど。

実はこの世界は御伽噺で、彼は、魔法で変えられた仮の姿。

・・・そして、私は、悪い魔女だつた。

彼を苦しめた、悪い悪い魔女。

こんなことを言つても、あなたはきっと私が[冗談を言つてゐる]と思つてしまふけど。

「・・・灰原さんは魔法使いだつたんですか？」

「え？」

彼は何処まで知つてゐるんだろう。何を知つてゐるんだろう。

彼はそういうれば他の小学生とは類を見ない頭の切れる持ち主だつ

たといつことに、今更のように思に出して。

もう秘密がバレても大丈夫だと呟つことはわかつていたけれど。でも。

「そう見える?」

「なんですか?」

「わあ、どうかしり」

くすくすと笑つて見せた表情も、なぜか次第に涙が出てきて、涙は思わず目頭を指で拭つた。

「・・・灰原さんは悪い魔法使いなんかじゃないですよ、いい魔法使いです」

「うかしら」

涙声を何とか隠そつと振舞つ哀に対して、光彦はいつもと変わらぬトーンで。

「そうですよ。そしてコナンくんは、いい魔法使いに変えられたシンデレラ、だつたんですよ。

それかコナンくん自体が魔法の国からやつてきた『魔法少年プリティコニー』とか?」

「・・・何それ」

思わずジト目をすれば、光彦は嬉しそうに笑つた。

「よかつた、いつもの灰原さんだ」

p.i r i r i r i r i p.i r i r i r i r i

はつとして我に返ればどこからか探偵バッヂが激しく鳴つていて。慌てて光彦がポケットからそれを取り出した。

「こちら光彦」

「こちら光彦、じゃねーよー一体何やつてんだよー灰原見つかっ

たのかよー！」

怒鳴り声は元太だ。夜だといつこのいつもと変わらぬ元気な声に、  
哀は思わずふつと噴出して。

「行きましょう」

光彦は手を差し出した。そして哀は手を差し出して、腰を上げた。

「『ゴー』ルはすぐそこですよ？」

「・・・なんだかずいぶん大人っぽいじゃない」

ふふ、と小さく笑えば、光彦は決意を込めた表情でこいつ言った。

「決めたんです。僕は、君を守るって」

「・・・え？」

「彼のようなスーパーマンにはなれないかもしれないけど。・・・  
これからは僕が守りますから。強くなりますから。君を守るべき男  
になりますから。」

「女の子が怯えて泣いてるのこのへんで助けにくるスーパーマンじゃたかが知れてるけどね」

軽く憎まれ口を叩けば、光彦はさつと困ったような顔をした。そ  
んな彼に対して、哀は『嘘よ』と声を上げて笑った。

(後書き)

此処までお読みいただき、ありがとうございます^v  
これは、2007年度『光哀企画』に投稿した作品でしたが、単に  
『コナンくんがいなくなつたあとの灰原哀』が  
書きたかったんです(笑)。で、思いついたのが肝試し。こんな感  
じになつちゃいました。

キャンプとかだとありきたりですからね。のっぺらぼうのみつちゃん、見てみたいものです(笑)。

一人一人お化けのメイクをしながら、齊かし方の指導とか熱烈にしてるんだろうな、有希子さん(笑)。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0700/>

---

月の光と悪い魔女

2010年11月14日17時08分発行